

とおほせらるゝに、おなじもの、中心にはあたる物かは、つぎに帥殿いたまふに、いみじうおくし給ひて、御てもわなゝき候にや、まとのあたりちかくだによらず、無邊世界を射給へるに、關白殿色あをくなりぬ、又入道殿いさせ給ふとて、攝政關白すべきものならば、このやあたれとおほせらるゝに、はじめとおなじやうに、まとのやぶるゝばかりいさせ給ひつゝ、きやうようしもてはやしきこえさせ給へるけふもさめて、ことにかうなりぬ、ちゝおとゝ帥殿になにかいる、ないそいとせいせさせ給ひて、ことさめにけり、入道殿やもどして、やがていでさせ給ひぬ、そのおりは左京大夫とぞ申し、ゆみをいみじくいさせ給ひしなり、又いみじくこのませ給ひしなり、けうに見ゆべき事ならねども、人のさまのいひいで給ふことのおもむきより、かたへはおくせられ給ふなめり、

〔小右記〕長和二年八月四日、昨日主上○三令密語右衛門督給曰、吾相撲日祈念伊勢太神、今年始有

相撲、若實位可無動者、左相撲一二三番可勝、以之可知也、而一二三番勝了者、是今日金吾所談資平也、事緣希有所記也、件一二三番右皆有理者也、就中二番縣高平有取手術、而都無所取如不覺也、後日問高平、申云、不覺無爲術、獻術所致也者、今承此事、且恐且悅、不思相撲之負、只歡實位之久、

字氣比

〔倭訓栞前編四〕うけひ 日本紀に、誓約、字誓、字祈、字などをよめり、又盟をうかふとよむも同じ、請

言の義いのりちかふ事をいへり、源氏物語に、こき殿などのうけはしげにのたまふといひ、伊勢物語に、罪もなき人をうけへばといへるは、詛コトスふ方にいへり、よて眞名本に、呪咀と填たり、古事記にも、宇氣比死コトスと見えたり、

〔倭訓栞中編三〕うけひ 請言の義、よて儀式帳に請字をよめり、呪咀又うけふともよめり、○中呪はかじり、詛はとこひとよめり、

〔古事記上〕爾天照大御神聞驚而詔、我那勢命之上來由者、必不善心、欲奪我國耳、即解御髮、纏御美豆